



今回は、旺盛に時代小説も執筆している宮部みゆきと、時代小説に大きな足跡を残した池波正太郎・松本清張の3作家を取り上げて、3作家の作品の舞台となった江戸の町を紹介いたします。

町の由来のほか、寺院・神社・川・橋・町奉行・奉行所・牢屋などを簡明に記してみたいと思います。但し、3人の作家のしかも限られた作品の紹介ですので、ここでは江戸の町の一端を紹介したに過ぎないことを、ご承知いただきたいと思います。

[資料リスト](#)

江戸の町

本所（墨田区） 隅田川の東岸一帯で、中世には江戸湾沿いの農村地帯でした。江戸市街の発展とともに本所・中之郷両村の町場化も進みましたが、明暦3年（1657）1月18日～19日の江戸大火の後、幕府の方針で急速な市街化が進められました。竪川・横川などの掘り割りが本所奉行の指揮のもと行われ、武家屋敷などが割渡されました。特に、寛文元年（1661）の両国橋架橋が、江戸との交通の利便性を高め、繁栄の契機になりました。

深川（江東区北西部） 天正18年（1590）徳川家康が江戸を城下町にした頃は、隅田川下流東側に位置する深川の辺りは大半が浅瀬か海でした。江戸時代初期に深川八郎右衛門が、深川村を開きその姓を村名にしたと伝わります。隅田川河口には寛永6年（1629）に獵師町ができて漁業が盛んになり、小名木川は、重要な水路として深川の発展に役立ちました。その後、深川は明暦3年（1657）の江戸大火を契機に埋め立てが進み、碁盤目状の町が形成されて、江戸の市街地として特色のある発展をしたのです。元禄14年（1701）年、現在の木場に江戸の材木を一手に扱う木場町ができて材木業が栄えました。また、靈巖寺をはじめ多くの寺院が深川に移転しました。富岡八幡宮は祭りと相撲で著名です。深川は縦横に水路があって水運の便が良いため米雑穀業・倉庫業・油・干鰯などの取引業が栄えました。



八丁堀（中央区八丁堀） 八丁堀は町奉行所の与力・同心が住んだ場所として知られています。彼らの組屋敷は、享保4年（1719）以降は八丁堀（中央区八丁堀1・2丁目あたり）にありました。組屋敷とは広い地所を一括して与え、組の者がそれぞれ分割して屋敷地とすることです。与力は200坪から300坪、同心は100坪ほどの屋敷地が与えられました。

十万坪（江東区） 享保8年（1723）に、江戸町人の近江屋庄兵衛、井籠屋万蔵が幕府に十万坪新地の新田開発を願い出て、江戸の塵芥を使って3年程で完成させました。庄兵衛の姓を取って千

田新田と名付けられています。その後、松平薩摩守の抱え地となりましたが、寛政8年(1796)に一橋家の領地となり一橋十萬坪の御領地(一橋家十萬石とも)といます。

砂村新田(江東区南砂と東砂の一部) 摂津国上福島から関東に進出した砂村新左衛門が開発した新田で、万治2年(1659)に検地が行われました。

深川海辺大工町(江東区清澄) 慶長元年(1596)に成立したといます。延宝年中(1673-81)まで海辺新町・海辺町と呼ばれ、のちに大工町が付されたのは船大工の居住が認められたためと考えられます。また、海辺大工町は湊としての機能を備えていました。これは、元和末から寛永初め頃(1620年代中頃か)に、北関東筋の着船の湊に取り立ててほしいと願い上げ、認められたことによります。

佃島(中央区佃島) 隅田川河口の干潟の洲を築地して作られた島で、徳川家康の江戸城入城に伴って摂津国西成郡佃村から移住した漁師達が、その干潟を寛永年間(1624-44)に拝領して居住したためその名が付きました。11月から3月にかけて、佃島の漁師達は江戸湾が白々と明けてくる頃、前夜からの四手網をあわただしく仕舞い、白魚漁を終えたといます。獲れた白魚はすぐに將軍御菜御膳御用として江戸城に運ばれました。残りは日本橋近くの小網町で売られました。これが魚河岸の始まりとも伝わります。

石川島(中央区) 石川島は佃島の上流側に位置します。寛永年間(1624-44)に船手頭の石川大隅守が、隅田川河口の中洲を拝領したことから付いた名です。寛政2年(1790)に、石川島と佃島の間を造成して設置されたのが人足寄場です。

江戸の寺院

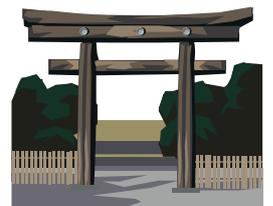
回向院(墨田区両国2丁目) 両国にある浄土宗の寺で、無縁寺ともいいます。開創は明暦3年(1657)で、幕府が同年の大火の犠牲者を供養するために建立しました。その後も、牢死者・刑死者・安政大地震の死者などが吊われています。また、鼠小僧次郎吉の墓もあります。寛政3年(1791)に境内で勧進相撲の興業が行われたのが、大相撲の起源といわれています。



靈巖寺(江東区白河1丁目) 元和6年(1620)頃、徳川家康・秀忠・家光の信の篤かった靈巖上人が沼地を埋め立てて靈巖島(中央区靈巖島)を造成し、そこに寺を開創しました。明暦3年(1657)の大火で類焼しましたが、翌年現在地に再建されました。関東十八檀林の一つであり、老中松平定信の菩提所でもあります。

江戸の神社

富岡八幡宮(江東区富岡) 寛永4年(1627)の創建で、続いて別当寺の永代寺が附属し門前町が形成されました。境内では貞享元年(1684)に勧進相撲が江戸で初めて行われたといます。元禄11年(1698)に永代橋が架かって参詣者が急増したといます。なお、永代寺は明治になると廃仏毀釈で廃寺になりました。跡地は深川公園です。



根津神社(文京区根津1丁目) 根津権現・須賀神社ともいいます。創立年は不詳です。元は現在の団子坂のあたりにあり、寛永3年(1626)に池之端の現在地に遷座しました。5代將軍徳川綱吉が奉建した、楼門・本殿・拝殿などが国の重要文化財に指定されています。

王子稻荷神社（北区岸町 1 丁目） 東国の稲荷神社の総司とされ、毎年大晦日の夜には諸国の狐が社地の東、古榎のあたりで装束を調え、参詣するとの伝説があります。現在も年の暮れには、この狐の参拝を再現する「王子・狐の行列」が行われています。



町奉行所・町奉行ほか

町奉行は江戸の市政を担当しましたが、江戸町奉行ではなく単に町奉行と称しました。老中支配に属し、享保 8 年(1723)の足高の制施行以後は役高が 3,000 石です。

定員：奉行の定員は慶長期(1596-1615)以降 2 名でしたが、元禄 15 年(1702)に 1 名増員されて 3 名となりました。しかし、享保 4 年(1719)以降は再び 2 名になりました。

場所：町奉行所が呉服橋内(南)と八重洲河岸内(北)に設置されたのは慶長 9 年(1604)といわれています。元禄 15 年(1702)には鍛冶橋内にも新役所が設置されましたが、享保 4 年(1719)に廃止されました。文化 3 年(1806)以降は、数寄屋橋門内が南町奉行所、呉服橋門内が北町奉行所として固定しました。

職掌：町奉行が管轄したのは、江戸市中から武家地・寺社地を除いた町地です。ここに属する町及び町人に関して、行政・立法・司法・治安警察・消防・災害救助などにわたり支配しました。

奉行の勤務は南北奉行所の月番制で、当番の月には午前 10 時頃登城し、午後 2 時頃下城してから町奉行所で訴訟その他の政務を処理しました。

組織：奉行所内の属僚である与力・同心のほか、囚獄方・本所道役・本所奉行(享保 4 年廃止)などを配下とし、また、3 人の町年寄を通して江戸の町を支配しました。

与力 江戸幕府は、諸奉行や番頭・物頭などを隊長としてこれに与力を付属させました。付属された与力は騎士の称であったため、一人を一騎と称しました。なお、与力は御目見以下の御家人でした。町奉行支配下の与力は、一時を除いて奉行が 2 人であったため 2 組、各 25 騎、全体(南町・北町奉行所)で 50 騎でした。彼らの給地は各 200 石でしたが、個人に直接宛がわれたものではなく、与力全体に上総・下総国において 1 万石が与えられていました。

同心 江戸時代の下級武士の役職名です。幕府は職制において番頭職・諸奉行職の主要なものに同心を付属させ、多くの場合同心の上役に与力をおきました。

町奉行所の同心は 240 人(南町・北町奉行所各 120 人)といわれ、町方同心・町同心とも呼ばれました。彼らは町奉行配下の与力に分属して与力を補佐し、町奉行所の政務を分担しました。その多くは与力の職掌分掌(内与力・年番方・例繰方・吟味方・牢屋見廻りほか)ごとに同心 2 名位の割合で配属されました。他に用部屋手付や三廻りといわれる、隠密廻り・定廻り・臨時廻りのほか、下馬廻り、門前廻りなどがありました。身分的には御抱席一代限りの奉公ですが事実上は世襲されました。役格は年寄から無足見習までの 11 格がありました。また、俸禄は 30 俵 2 人扶持を標準とし、格によって若干の差がありました。

与力・同心の組屋敷は、享保 4 年(1719)以降八丁堀に集中していたため、俗に「八丁堀の旦那」「八丁堀御役人衆」などと呼ばれました。

岡っ引(目明し) 手先・小者・御用聞きなどともいいます。江戸町奉行所では三廻り(隠密廻り・定廻り・臨時廻り)の同心が自筆の手札を渡し、建前は物持人足の名目で給金を与えて雇傭した私的使用人です。岡っ引は市中監察や情報収集のため同心が手先として使いましたが、やくざとの二足のわらじを履いた者も多かったといえます。幕末には南北奉行所で 400 人近くおり、子分も加えると 1,000 人に達したといえます。

町年寄・名主・差配

江戸の町人の自治組織は、頂点に「町年寄」がいます。これは家康の江戸城入城以来の制度で、「樽屋・奈良屋・喜多村」の3家が代々世襲で務めました。3家は姓を名乗ることを許され、その職務は町奉行所からの御触を伝達、奉行所の依頼で諸々の調査を行う、新地の開発・地割を行い、地代・運上金を集めて上納を行うなどでした。また、彼らの主な収入は拝領した土地を貸すことでした。

町年寄の下には町年寄を補助する「名主」がいました。名主は家康の江戸城入城当時の家柄である「草創名主」、それに次ぐ歴史を持つ「古町名主」、江戸の町が広がっていくにつれて就任した「平名主」などの格がありました。

名主は町の取りまとめ役で、その町の地主や家持を束ねていました。その下には地主・家持の貸家・長屋に暮らす、地借り・店借り・間借りの人達がありました。江戸の町が発展してきますと、地主・家持では手が回らないことが起って来ました。そのため地主・家持に代わって店賃や地代を取り立て、店子を監督する役目を担う人達が登場しました。それが「差配人」で、家主・家守・大家などとも呼ばれました。差配人は店子の世話だけではなく、五人組をつくり、名主を補佐して町の自治を支える事が重要な仕事でした。実際、差配人は名主とともに「町役人」と呼ばれました。

小伝馬町牢屋敷

江戸の牢は天正18年(1590)徳川家康の江戸城入城後に、常盤橋外(中央区日本橋本石町)に設けられましたが、慶長18年(1613)に小伝馬町(中央区日本橋小伝馬町)に移転し、明治維新に至っています。

牢屋敷を支配するのは「囚獄」(牢屋奉行は俗称)といい、石出帯刀が世襲しました。その定員は350人程度で、最大収容数は700人といえます。牢は身分、性別、罪種などで分けられていました。地坪は3,440坪余、建坪は916坪余と明治5年(1872)8月の「小伝馬町牢屋敷之図」にあります。

明暦3年(1657)1月の大火の際、小伝馬町の牢屋敷にも火が移りました。石出帯刀(吉深・常軒:慶長18年(1613)-元禄2年(1689))には牢を開ける権限はありませんでしたが、牢格子を打ち破って120人余りと伝わる囚人を、浅草新寺町の善慶寺に戻るよう言い渡したうえで解き放ちました。解き放された囚人は翌日までに全員が戻ってきたといえます。

享保2年(1717)に大岡忠相が町奉行になり、牢名主の規制・給与の改善・拷問の緩和・牢死者の減少策・牢屋見廻り力制による牢の二重監督制などを実施し、火災時に囚獄の権限による囚人の切り放ち(一時解放)制も定着して、人道的配慮がみられたといえます。しかし、効果は一時的であったようです。また、天保の獄制改革も同様といわれます。

人足寄場

寛政2年(1790)に、老中松平定信が火付盗賊改長谷川平蔵の献言を入れて設置しました。創立の理念(寛政度の趣意)は、無宿(戸籍帳である人別帳から外された者をいう)への授産・更生という無罪の無宿に対する仁恵の措置でした。しかし、寄場は懲治監的な性格を持つものであり、同時に不穏分子としての無宿を予防拘禁するという治安上の意図と、無宿に授産更生の場を与えるという社会政策上の意図がありました。

設立当初は長谷川平蔵が責任者でしたが、寛政4年(1792)からは寄場奉行の支配となりました。

用地は、石川島と佃島の間にあった鉄砲洲向島の蘆沼 16,030 余坪の低湿地を御用地としました。寛政4年(1792)には 16,700 坪の石川屋敷が上地となり、人足寄場の付属地として編入されました。

収容者数は寛政から文化・文政期(1804-30)にかけては 140~150 人程度でしたが、天保期(1830-44)は飢饉のため浮浪者が激増し、収容者は 400~500 人、多い時は 600 人余に達しました。これは有罪受刑者が増加したためであり、寄場は実質上の懲役刑的施設に変わっていきました。

設立当初は本人の得手を生かし、次第に作業範囲を拡大していきましたが、後には油絞りが寄場の主要収入源になり、天保期以降幕末にかけて年 800 両ほどに達しました。収容者の労賃は製品売却代の 2 割を道具代などとして差引き、残りの三分の一は強制的に貯金をさせ出所の際に与えました。

その他の施設

御米蔵(台東区蔵前) 元和6年(1620)に出来たものです。面積は 27,500 坪で、一番堀から八番堀まで横堀がありました。隅田川から舟が何艘も横堀に漕ぎ入れて、米俵を蔵に運んだり、蔵から舟に積み込みました。四番堀と五番堀との間に首尾の松がありました。これは、この松の近くに船を泊め、男女の首尾の場としていたことによるそうです。なお、尾張屋版「東都浅草絵図」(嘉永6年(1853))には「浅草御蔵」とあります。

御蔵蜆 舟から米を運ぶたびに、いくらかの米が川に落ちます。そこにいる蜆は米を食べて大きくなるので極上とされていました。これを御蔵蜆と呼んで、毎日5升と採れなかったといいますが、味が良いので市価は5倍とされていました。

猿江御材木蔵(江東区毛利2丁目) 享保19年(1734)に本所横綱町(墨田区)から移転した幕府の用材の貯木場です。南は小名木川、北は豎川、東は横十間川が流れていました。現在は付近一帯が猿江恩賜公園になっています。

江戸の川

隅田川 江戸時代に隅田川といえば、綾瀬川との合流地点から下流をいいました。鐘ヶ淵から下流を隅田川と呼んだようです。江戸時代も隅田川と記すのが一般的でしたが、角田川とも記しました。また、呼称においては大川・浅草川・宮戸川とも唱えました。

小名木川 天正18年(1590)、家康が行徳の塩を搬入するため、隅田川と旧中川を結ぶ直線の水路を掘り割りしたといえます。川の名は工事を行った名主の小名木四郎兵衛の姓から付けられたと伝わります。なお、初めは女木沢・うなぎ川などとも呼ばれたようです。

豎川 明暦3年(1657)の大火の後、万治2年(1659)に小名木川の北側を並行して掘り割りした水路です。江戸城からみて東西(縦)の方向に、「本庄一ツ目通り」から「さかさ井」(逆井)まで掘り通しました。

横川 豎川と同時に掘られたもので、江戸城からみて南北(横)の方向に走る水路です。豎川と交差する地点には北辻橋・南辻橋が、豎川には新辻橋(三ツ目橋と四ツ目橋の間)が架けられています。



横十間川 横川の東側を並行して掘り割りした水路です。横十間川と豎川が交差する南西側には猿江御材木蔵があります。

六間堀（墨田区・江東区） 隅田川と横川の間で小名木川と豎川を結ぶように六間堀が、六間堀から東には五間堀が掘られていました。六間堀が開削されたのは万治年間（1658～61）か、それ以前とみられています。堀の一部は江東区新大橋3丁目の児童公園などになっています。

江戸の橋

江戸時代、隅田川には5つの橋が架けられていました。上流から千住大橋・大川橋（吾妻橋）・両国橋・新大橋・永代橋の5つになります。両国橋は現在100m上流に架橋され、永代橋は現在150m下流に架橋されています。ほかの3つの橋は現在もほぼ同じ場所に架けられています。

千住大橋 徳川家康の江戸城入城まもない、文禄3年（1594）隅田川に最初に架けられました。千住は日光・奥州街道の第一の宿場で、江戸4宿の一つでした。

大川橋（吾妻橋） 安永3年（1774）に隅田川に架かる5番目の橋として竣工しました。長さは76間（約138m）です。近吾堂版（嘉永3年（1850））と尾張屋版（嘉永6年（1853））の切絵図には、「大川橋」「東橋ト云う」と記されています（なお、橋の長さは資料によって若干異なります）。

両国橋 明暦3年（1657）の大火を契機に建設され、寛文元年（1661）隅田川に架かる2番目の橋として竣工しました。完成時の長さ96間（約175m）、幅4間（約7.3m）でした。初め「大橋」と通称されましたが、元禄6年（1693）に「新大橋」が架けられると、新大橋のことを略して「大橋」と呼ぶことが多かったといえます。文化2年（1805）頃の「御江戸大地図」には「両国橋」と記されています。両国橋の名は、隅田川が江戸中期まで武蔵と下総の国境であったため、両国の架け橋であることによるといいます。なお、元禄9年（1696）に改築した際、橋の東西のたもとの一区画は非常時の火除け地、日常時においては往来をスムーズにするための広小路として確保されました。



西側の広小路には橋番所が設けられ、渡り賃2文を徴収しました。また、橋上には橋番所が設けられ、橋番人は清掃、簡単な修理、物売りや人寄せなどの監視や注意などを行いました。両国橋が完成してから寛政12年（1800）までで、流失などによる改架は2回、大修理は5回を数えるそうです。

新大橋 元禄6年（1693）に隅田川に架かる3番目の橋として竣工しました。文化2年（1805）頃の長さは108間（約196m）です。

永代橋 元禄11年（1698）8月新大橋に続き、隅田川に架かる4番目の橋として竣工しました。長さは120間（約218m）です。この橋は墨田川の最下流に位置しました。そこは河口であるため、複雑な地形で潮流や流砂などの変化の激しいところでした。また、仙台河岸などの河岸が上流にあり、帆を立てた菱垣廻船などの往来が激しかったため橋脚が高くなりました。

文化4年（1807）8月19日、深川八幡の本社再建が成り34年振りに祭礼が行われることもあって、群衆でひしめきあっていた永代橋は中央付近で二つ折りに落橋しました。この時の死者は730人余ともいわれます。なお、橋は文化5年（1808）11月に再興されました。

富岡橋 深川平野町と一色町・黒江町の間で堀に架かる橋です。長さ10間半（約19m）、幅1丈3尺（約4m）。近くの法乗院に閻魔堂があるので、この橋を俗に閻魔堂橋と呼びました。

一ツ目橋（一之橋） 豎川に隅田川に近い方から順に、一之橋から五之橋といわれる橋（横川との交差点には新辻橋）が架かっていました。これらの橋は「一ツ目（之）橋」「二ツ目（之）橋」などと通称されました。

筋違橋（千代田区神田須田町1丁目） 神田川に架かるこの橋の名は、中山道と将軍が上野寛永寺に向かう御成道が交差するからとも、橋が神田川に対して斜めに架けられていたことからともいいます。

数寄屋橋（有楽町マリオン付近） 江戸城と町人地を分ける堀に架けられた橋です。町人地から橋を渡ると江戸城数寄屋橋門があり、門内に南町奉行所がありました。

人物

根岸鎮衛 やすもり 元文2年（1737）に生まれました。父は安生定洪です。宝暦8年（1758）根岸衛規の養子になり家督を継ぎました。同年勘定となり、勘定所留役、勘定組頭、勘定吟味役、佐渡奉行、勘定奉行・従五位下肥前守、寛政10年（1798）南町奉行になります。勘定から町奉行になり、知行も2度にわたる加増で1,000石になるなど異例の出世を遂げました。町奉行を17年間務め、松平定信の信任が篤かったといえます。随筆に市井の奇談や噂話を収集した『耳袋』があります。文化12年（1815）5月に79歳で没しました。

長谷川平蔵 のぶため 延享2年（1745）火付盗賊改長谷川宣雄の子として江戸に生まれました。名は宣以で、平蔵と称しました。明和5年（1768）に將軍家治に拝謁し、安永3年（1774）西の丸書院番士、天明4年（1784）に西の丸徒頭となり、世禄400石に600石を加えられました。同6年（1786）に先手弓頭となります。同7年（1787）に火付盗賊改の加役を命じられ、寛政7年（1795）5月に51歳で亡くなるまで8年間その職にありました。

寛政の改革にあたり、老中松平定信に無宿者收容の寄場建設策を建議し、寛政2年（1790）から同4年まで人足寄場取扱を兼務しました。平蔵は石川島の6,000坪余の人足寄場において、無宿人の更生のため職業訓練を行いました。

松平定信は、平蔵を「この人功利をむさぼるが故に山師などどいふ姦なることもあるよしにて」（「宇下人言」）と記し、平蔵とほぼ同じ時代を生きた旗本の森山孝盛は、火付盗賊改在任中の平蔵を自叙伝で「小ざかしき生質」と記しています。

石出帯刀 牢屋敷の長を因獄（牢屋奉行は俗称）といい、石出帯刀が世襲しました。町奉行の支配下で、牢屋の管理・行刑事務を掌握しました。旗本格で役高は300俵10人扶持です。配下には鍵役・数役・打役・小頭・世話役・書役・賄役などがおり、牢屋同心50人・牢屋下人40数人を従え、牢内の取締り、刑執行の立会いなどにあたりました。

本所七不思議

本所七不思議は必ずしも確定した7つの話ではありません。片葉の芦、津軽の太鼓（普通大名屋敷の火の見櫓には板木があり、火事の際は板木を打つが、津軽家では火の見櫓で太鼓を打つ）、送り提灯、置いてけ堀、落葉なしの椎、馬鹿囃子（狸囃子）、足洗い屋敷、消えずの行燈、燈りなしの蕎麦の9つの話が伝わっています。



宮部みゆき—小説の舞台—

1『本所深川ふしぎ草紙』（新人物往来社、平成3年3月）は、本所七不思議を題材とする7作品を所収しています。また、本所・深川をあずかり「回向院の旦那」と呼ばれる岡っ引きの茂七も登場

します。

2『かまいたち』(新人物往来社、平成4年1月)は4作品を所収しています。「師走の客」は千住上宿の旅籠が舞台です。「迷い鳩」には南町奉行根岸肥前守が登場します。「騒ぐ刀」には南町奉行所定廻り同心が登場し、砂村の古道具屋も出てきます。

3『震える岩 霊験お初捕物控』(新人物往来社、平成5年9月)には南町奉行根岸肥前守が登場し、深川三間町や霊巖寺などが舞台になっています。

4『幻色江戸ごよみ』(新人物往来社、平成6年7月)は12作品の所収です。「紅の玉」は王子稻荷神社が、「小袖の手」は深川冬木町が舞台です。「神無月」には猿江稻荷と猿江御材木蔵が描かれています。「侘助の花」の舞台は根津神社です。

5『初ものがたり』(PHP研究所、平成7年7月)は7作品を所収しています。「お勢殺し」では、深川富岡橋のたもとに作品で重要な役割を果たす屋台が登場します。また、ここでも岡っ引きの茂七が登場します。「白魚の目」では佃島近辺の白魚漁が描かれています。「太郎柿次郎柿」も深川西町が舞台です。「遺恨の桜」には十万坪が登場します。

6『堪忍箱』(新人物往来社、平成8年10月)は8作品を所収しています。「堪忍箱」では本所回向院脇、通称寺町通りにある菓子問屋近江屋が舞台です。「敵持ち」では新大橋、御糺蔵脇の深川元町が描かれています。「十六夜鬨」も深川高橋が舞台です。「お墓の下まで」も深川富川町が舞台です。「謀りごと」も深川吉永町が舞台です。「てんびんばかり」は徳兵衛長屋深川浄心寺脇の山本町が舞台です。「砂村新田」は、深川海辺大工町などが舞台です。なお、この作品集では長屋の庶民と差配人がいくつかの作品で描かれています。

7『天狗風 霊験お初捕物控二』(新人物往来社、平成9年11月)は、南町奉行根岸肥前守が登場します。また、日本橋通町や霊巖寺などが舞台です。

8『平成お徒歩日記』(新潮社、平成10年6月)は、著者が現在の東京ほかで江戸の面影を尋ねて歩く紀行文です。

9『ぼんくら』(講談社、平成12年4月)は深川の鉄瓶長屋が描かれ、同心の井筒平四郎(30俵2人扶持)が殺人事件を追います。鉄瓶長屋は、小名木川と横川が交わるところ、新高橋のたもとに近い深川北町の一角にあります。また、富岡八幡宮や小伝馬町の牢屋敷も登場します。

10『あやし』(角川書店、平成12年7月)は怪異がテーマの9作品を所収しています。「影牢」は深川六間堀町が舞台です。「布団部屋」は、深川永代寺門前東町が舞台です。「梅の雨降る」も深川北六間堀町が舞台です。「安達家の鬼」は日本橋通町が舞台です。「女の首」は本所一ツ目橋の先の店が舞台になっています。「時雨鬼」「灰神楽」には本所・深川の岡っ引きである政五郎が登場します。また、「蜷塚」には御蔵蜷が記されています。

11『あかんべえ』(PHP研究所、平成14年3月)は、深川・海辺大工町に開店した料理屋「ふね屋」の12歳の娘おりんが主人公です。亡者が見える、おりんの恐怖感が感じられる作品です。

12『日暮らし』上・下(講談社、平成17年1月)は、『ぼんくら』の続きの物語です。幸兵衛長屋の人間模様が描かれ、同心の井筒平四郎、岡っ引きの政五郎が再び登場します。

13『孤宿の人』上・下(新人物往来社、平成17年6月)は、讃岐国丸海藩に配流された加賀殿をめぐる物語です(なお、丸海藩は丸亀藩、加賀殿は丸亀藩に預けられた、元町奉行の鳥居甲斐守がモデルかもしれません)。

14『おそろし 三島屋変調百物語事始』(角川書店、平成20年7月)は、神田筋違門の南に位置する、三島町の一隅(千代田区神田富山町~神田東松下町あたり)にある袋物屋三島屋伊兵衛の名代ちかが、三島屋に語り手を迎えて話を聞く変わり百物語です。なお、物語の時代は天保の改革前と思われる。

15『あんじゅう 三島屋変調百物語事続』（中央公論新社、平成 22 年 7 月）も、14 と同様の物語です。

16『お文の影』（角川書店、平成 26 年 6 月）は『ばんば憑き』（角川書店、平成 23 年 2 月）の改題で、6 作品を所収しています。江戸を舞台にした怪談集で、本所・深川も描かれています。

17『おまえさん』上・下（講談社、平成 23 年 9 月）は、本所深川方の臨時廻り同心である井筒平四郎が活躍する、『ぼんくら』『日暮らし』に続くシリーズ 3 作目です。

18『泣き童子 三島屋変調百物語事参之続』（文芸春秋、平成 25 年 6 月）も、14・15 と同様の物語です。

19『桜ほうさら』（PHP 研究所、平成 25 年 2 月）は、4 作品を所収しています。深川北長堀町の富勘長屋の住人古橋笙之介を主人公とする物語です。

20『宮部みゆきの江戸怪談散歩』（中経出版、平成 25 年 8 月）は、物語の舞台である本所・深川ほかを紹介したりしています。

21『荒神』（朝日新聞出版、平成 26 年 8 月）は、東北の小藩の山村を襲う怪物とそれに対処する村人達を描いています。

池波正太郎—小説の舞台—

『鬼平犯科帳』は、池波正太郎が長谷川平蔵（通称、鬼の平蔵）を主人公に、与力・同心・盗人・密偵などとの人間関係が繰り広げられる時代小説（捕物帳）です。昭和 42 年（1967）12 月『オール読物』において先行作の「浅草・御厩河岸」で連載を開始し、翌年 1 月から鬼平犯科帳という連作で読み切りの短編を執筆しました。以降、23 年に渡り 135 話（長編を 1 話とする）を連載した、同氏の代表作です。

「寒月六間堀」は、金貸しの山下藤四郎に息子を殺された老武士の市口瀬兵衛が、息子の仇を討つのを平蔵が助太刀する話です。瀬兵衛は平蔵の助太刀で六間堀に架かる猿子橋（江東区常磐町 1 丁目交差点）で見事仇を討ちます。

「大川の隠居」は、浅草を舞台に鬼平と船宿の老船頭で元盗賊の友五郎との駆け引きを描いた、池波正太郎が鬼平ベスト 1 にあげる作品です。大川の隠居とは隅田川の巨鯉の異名で、巨鯉のモデルになったのが、浅草の龍宝寺（鯉寺）の池にいたという鯉です。その鯉は嘉永期（1848-54）に隅田川で捕えられた体長が 120cm を超える大鯉で、龍宝寺境内の池に放しましたが傷が元で死んでしまったため、その鯉を食したそうですが、食べた者が高熱に苦しみ、死者も出たため供養してやっと平癒したといわれます。その供養塔が同寺境内にあります。

『剣客商売』は、秋山小兵衛・大治郎父子を主人公として書き続けられた、悪人を懲らしめる物語です。父子の剣は無外流で実在する流派です。また、時代は田沼意次が政権を担った安永・天明期（1772-89）です。「浮枕」は『剣客商売』のシリーズ最終巻で、秋山小兵衛が 26 年前、40 歳の時に深川十万坪にある千田稻荷裏手の草原で、ある敵討ちの立会人になったことがある、という回想から始まります。千田稻荷神社（江東区千田）は享保期（1716-36）に千田新田を開発した千田庄兵衛が創建し、昭和 29 年（1954）に宇迦八幡宮と名を変えています。

松本清張—小説の舞台—

1『大奥婦女記』（新婦人、昭和 30 年 10 月～同 31 年 12 月連載）は、江戸城大奥の伝記です。

2『無宿人別帳』（オール読物、昭和 32 年 9 月～同 33 年 8 月連載）は、時代伝綺小説で、作者の自

由な空想によって構築した物語です。10 作品を所収しています。「海嘯（つなみ）」は石川島人足寄場が舞台で、「おのれの顔」「赤猫」「雨と川の音」は小伝馬町の牢が舞台です。

3『かげろう絵図』（東京新聞夕刊、昭和 33 年 5 月～同 34 年 10 月連載）は、11 代将軍家斉の時代である天保期に、幕府中枢部ではかない権力闘争を繰り広げた者たちを描いた作品です。

4『天保図録』（週刊朝日、昭和 37 年 4 月～同 39 年 12 月連載）は、『かげろう絵図』に続く天保の改革期（1841 年 10 月～1843 年 9 月）を舞台に、幕府中枢部を描いた作品です。

5『乱灯江戸影絵』（朝日新聞、昭和 38 年 3 月～同 39 年 4 月連載）は、8 代将軍吉宗の時代における幕府中枢が舞台の物語です。

6『彩色江戸切絵図』（オール読物、昭和 39 年 1 月～12 月連載）は、時代小説（捕物帳風）で 6 作品を所収しています。舞台は日本橋や両国です。

7『逃亡』（信濃毎日新聞ほか 11 紙連載、昭和 39 年 5 月～同 40 年 5 月）は、権力悪の犠牲者になった一人の博打打の逃亡生活を描いています。

8『鬼火の町』（潮、昭和 40 年 8 月～同 41 年 11 月）は、江戸の町が舞台の推理小説です。天保 11 年（1840）5 月 6 日の朝、浅草側の待父山も向島側の三囲神社も霧の中、人の乗っていない猪牙（ちよき）が隅田川で発見されることで小説の幕が開きます。

9『紅刷り江戸噂』（小説現代、昭和 42 年 1 月～同 12 月）は、捕物帳風の時代小説で 6 作品を所収しています。1 月の七種（ななくさ）、2 月の初午、5 月の節句人形、11 月の吹革祭（ふいごまつり）など、江戸の町の風習を紹介していることに特徴がみられます。

〔作品は江戸の町が舞台になっている作品を抄出しています。〕

【参考文献】

『江戸の町』 岸井良衛著 中央公論社 昭和 51 年 5 月

『復元 江戸情報地図』 朝日新聞社 平成 6 年 10 月

『国史大辞典』 吉川弘文館 昭和 54 年～平成 9 年

『江戸名所 隅田川 絵解き案内』 棚橋正博著 小学館 平成 10 年 5 月

『墨田川の伝説と歴史』 すみだ郷土資料館編 東京堂出版 平成 12 年 6 月

『図説城下町江戸』 学習研究社 平成 21 年 3 月

『江戸の紀行文』 板坂耀子著 中央公論新社 平成 23 年 1 月

『一個人 大江戸入門』 KK ベストセラーズ 平成 23 年 5 月

『東京今昔 江戸散歩』 山本博文著 中経出版 平成 23 年 12 月

「下町文化」NO. 259 江東区文化観光課 平成 24 年 9 月

